姫路城城下町跡

―姫路城跡第343次発掘調査報告書―

2017

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400年を経た現在も威容を誇っています。姫路城下町は、天守のある姫山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中枢機能の置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されています。このうち内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され保護・顕彰が図られております。

一方、町人地を中心とする外曲輪は、江戸時代以来、播磨地域の経済の中心地として発展し、現在も中核都市にふさわしい都心づくりが進められています。今回、調査を行った綿町は、江戸時代には西国街道が町内を通り、姫路藩の御切手会所が置かれるなど城下経済の中心地にあたります。そうした一画で発掘調査を実施し、多くの遺構・遺物を確認することができました。ここにその成果を報告し、姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました山陽電気鉄道株式会社、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成29年（2017年）3月31日

姫路市教育委員会

教育長　中杉　隆夫

例　言

1. 本書は姫路市が山陽電気鉄道株式会社の委託を受け、姫路市綿町 135 番において実施した姫路城城下町跡における発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査の実施ならびに本報告書の刊行に際しては、山陽電気鉄道株式会社に多大なるご協力を頂いた。また、現地作業では安西工業株式会社にご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会　生涯学習部　埋蔵文化財センターが実施した。現地調査開始から整理作業終了までの体制は次頁のとおりである。
4. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
5. 発掘調査・出土品整理および報告書作成においては、下記の方々・機関より御協力・御教示を賜った。深く感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）

   岡田章一、工藤茂博、城南地区連合自治会、姫路市立城郭研究室、綿町自治会

凡　例

1. 近世姫路城は、文化財保護法により「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地である「姫路城城下町跡」に区別されている。調査次数については、これを区別せず「姫路城跡第〇次」としている。また、江戸時代の城下町についての言及には「姫路城下町」を使用している。
2. 遺構名の表記は、文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』記載の略号を使用したが、報告書の記載上、遺構の性格が明らかな場合は竈、井戸等と表記した。遺構名は遺構面毎に 1 番から番号を付した。江戸時代以前の遺構については 2- 遺構名と記載している。
3. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。
4. 土層注記に用いた色調は『新版　標準土色帳』（1999 年度版）に準拠している。
5. 本書で用いる分類名・土器編年および年代観は次の文献によっている。

   肥前陶器・磁器：九州近世陶磁学会事務局　2000、備前焼：乗岡 2000、丹波焼：長谷川 2006、土製煮炊具：長谷川 2007
   土師器皿：森 1991、焙烙：中川 2012

目　次

序
例　言・凡　例
目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第 1 節　調査に至る経緯 …… 1
　第 2 節　調査の経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 1

第Ⅲ章　調査の結果 …… 4
　第 1 節　調査区の層序 …… 4
　第 2 節　江戸時代の遺構と遺物 …… 4
　第 3 節　江戸時代以前の遺構と遺物 …… 16

第Ⅳ章　総括 …… 24

写真図版 …… 25

発掘調査の体制

姫路市教育委員会
　教 育 長　中杉隆夫
　教育次長　林　尚秀（～平成 27 年 6 月 30 日）
　　八木　優（平成 27 年 7 月 1 日～）
生涯学習部
　部　　長　植原正則（平成 27 年 7 月 1 日～）
文化財課
　課　　長　福永明彦（～平成 27 年 6 月 30 日）
　　花幡和宏（平成 27 年 7 月 1 日～）
　課長補佐　大谷輝彦（～平成 28 年 3 月 31 日 係長）
　技術主任　南　憲和
埋蔵文化財センター
　館　　長　秋枝　芳（～平成 28 年 3 月 31 日）
　　前田光則（平成 28 年 4 月 1 日～）
　課長補佐　岡崎政俊（～平成 28 年 3 月 31 日 係長）
　係　　長　森　恒裕
　技術主任　小柴治子
　　福井　優
　　中川　猛【調査・整理担当】
　　関　梓（～平成 28 年 3 月 31 日 技師）
　主　　事　小林啓佑
　技　　師　黒田祐介
　嘱託職員　玉越綾子【調査担当】
　　黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、
　　田中章子、野村知子、松田聡子
　　三輪悠代
　臨時職員　寺本祐子、藤村由紀

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

姫路市綿町135番、136番、137番、138番、147番において山陽電気鉄道株式会社による集合住宅の建設工事が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡(遺跡番号:020169)に所在する。

平成27年6月3日付で山陽電気鉄道株式会社より文化財保護法第93条に基づく届出が姫路市教育委員会宛あった。届出の内容に基づいて協議を行い、平成27年7月3日から7月10日にかけて敷地内の9箇所において確認調査（姫路城跡第340次）を実施した。調査の結果、全ての調査区で遺構・遺物が良好に残存していることが確認できたことから、工事により遺構面が影響を受ける範囲を含めた取り扱い協議を行った。協議の結果、遺跡の保存が困難な666.1625㎡を対象として、記録保存を図るため全面調査を実施することとなった。平成27年7月27日付兵庫県教育委員会からの通知に基づいて、平成27年9月3日に姫路市と事業者とで委託契約を締結し、対象となる範囲の全面調査を実施した。

第2節　調査の経緯

調査は、敷地内で残土置場を確保する関係上3分割して実施した。平成27年9月8日に敷地北側から開始し、10月5日から南側、10月28日から西側へと順に調査した。確認調査の成果から調査範囲のうち、西側の敷地（255.81㎡）については、遺構面を2面調査した。調査はバックホウで盛土・造成土、旧建物基礎等を除去した後、以下は人力で掘削し、遺構検出を行い、検出した遺構の発掘を行った。遺構発掘の進展に伴い適宜、記録写真撮影、遺構実測を実施した。遺構については、北側から連続して遺構番号を付した。平成27年10月16日に兵庫県教育委員会担当者の現地指導を受けた。調査成果を広く公開するため、平成27年10月17日に敷地南側の調査区で第1回の現地説明会を行い、調査の終盤となる平成27年11月25日に報道発表を行い、11月28日に敷地西側の調査区において現地説明会を行った。その後、断割調査等を行い12月1日に現地での全ての作業を終えた。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

姫路城城下町跡は、姫路市域を南北に貫く市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、姫路を基点として東へは丹波・有馬方面へ、西へは美作・因幡へと街道が延びている。市川・夢前川を通じて但馬あるいは山陰地方ともつながり、南側には瀬戸内海航路があるなど交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として近世姫路城は成立した。近世姫路城は池田輝政により、慶長6年から同14年までかけて平野部と独立丘陵である姫山・鷺山を利用して作られた平山城である。独立丘陵の標高は約50m、平野部は11～15mを測る。市川の支流である船場川を西限とし、姫山・鷺山を囲うように内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされている。

調査地である綿町は、外曲輪に所在する。町人地であり江戸時代の「本町・綿町・元塩町旧記丁格録」によれば「三丁町之儀は、往古より御城下町頭丁と被為成置」とあり「頭丁」の一つであった（三浦1997）。また、文政3年（1820）には姫路藩御切手会所が、翌4年には御国産木綿会所が併設されるなど城下経済の中心でもあった。調査地の南側の道路は、西国街道であり、戦後の区画整理により幅員等は変更されたものの江戸時代の位置を踏襲している。姫路城下町の絵図については江戸時代を通じて多く残され

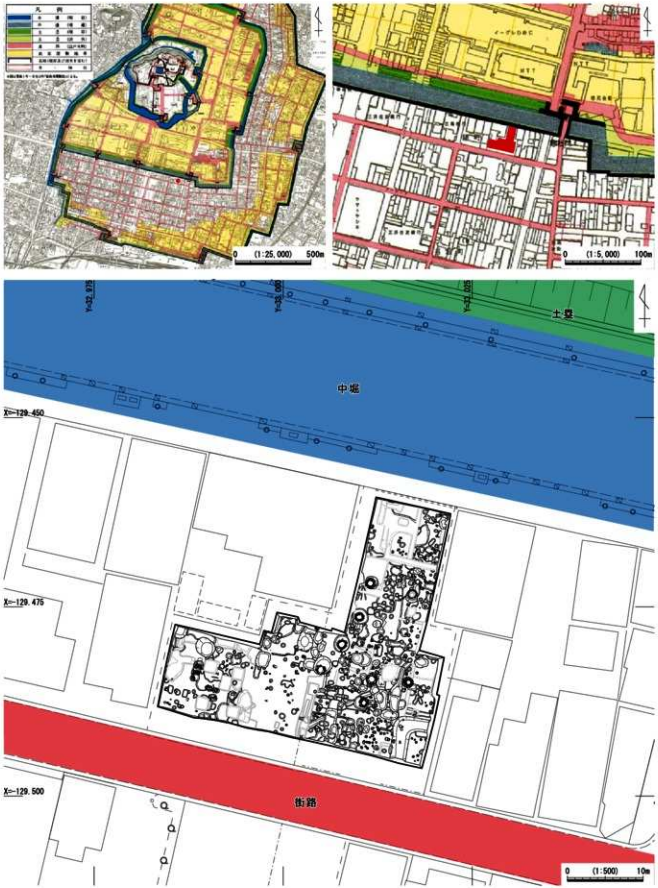

図1　調査位置図

ているが、町人地の住人あるいは所持者についての情報を記す絵図は少ない。しかしながら、綿町については万治3年、寛延期頃と宝暦期以降の屋敷の所持者の記された史料が残っている（三浦1997）。史料に記載された寸法に基づき、1間＝6尺5寸として換算したものが図2である。実際の土地形状は複雑であろうが、表地口と裏行きを単純に幅と奥行とし、長方形の町屋の連続として表現した。これによれば、屋敷の所持者の異同はあるものの、万治3年と寛延頃の表地口は見事に一致する。裏行きについては一部で異同があるものの大きな変化は認められない。両史料の比較からは、綿町のほぼ中央に位置する「あぼしや弥三兵衛」の屋敷地が寛延頃に「七右衛門」と「丁中」との2軒に分割されただけである。しかしながら、屋敷の所持者については「七右衛門」が8軒、「弥八郎」が4軒、「岩之助」「やゑ」が3軒と所持者の集中が進んでいる。宝暦期以後にはさらに屋敷内部の分割が進行することが指摘されている（三浦1997）。

調査地は播磨国府推定地である本町遺跡に近接している。そのため調査地の北側にあたる国道2号整備で大量の瓦が出土し、綿町で行われた過去の調査においても布目瓦が散見されるなど、播磨国府（国衙）の広がりを探る上で重要な地点の一つである。合わせて江戸時代の綿町はいわゆる築城ライン（N14°E）に沿った町割がなされている。対して綿町より東側はより古い時期の基準と考えられている総社ライン（N5°E）が存在する（堀田1988）。このように綿町は都市軸の境界に位置し、古代・中世から近世への変遷を知るうえで鍵となる地域の一つといえる。

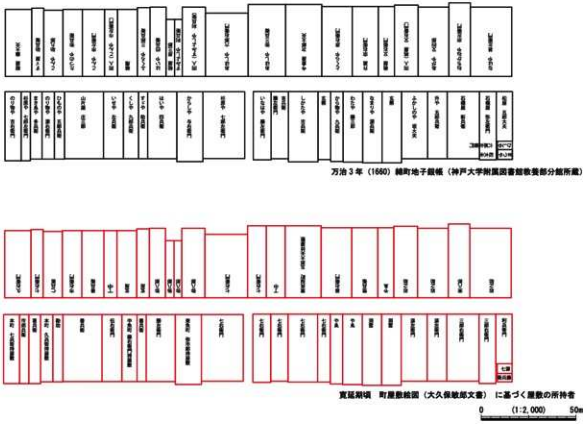

図2　綿町屋敷地所持者名

第Ⅲ章　調査の結果

第1節　調査区の層序

調査区の基本層序は、盛土、近現代整地層、近世整地層、5Y5/1 ～ 5/2灰色細砂（中世耕土）を経て10YR5/3黄褐色の地山に至る。地山の標高は概ね12.6m で、調査区北側では砂礫が高まっているが、地山の検出レベルは南側と概ね同一である。東壁及び南壁の土層断面図（図4）に示すとおり、基本層序が確認できる箇所もあるものの、調査地の大半は、近現代における建物の基礎等によりかなりの撹乱を受けていた。そのため、遺構の検出は調査区の東半分では地山面で、西半分では中世耕土上面を第1面とし、地山を第2面として調査した。

第2節　江戸時代の遺構と遺物

屋敷境（図3）　調査地は町屋であり、南側の街道に面して出入口を有する南北に長い屋敷地が連続している。絵図等の史料から復元すると調査地は4軒の屋敷地にまたがり、屋敷境を3箇所で検出できるはずである。しかしながら、調査では明確な遺構としての屋敷境は検出できていない。白銀町で行った姫路城跡第289次では、杭列→（素掘り）溝→石組溝の変遷が確認されているが、北条口二丁目で行った姫路城跡第354次では、礎石及び石列による屋敷境を検出しており、掘り込みを伴う屋敷境は確認できていない。上記事例から姫路城下町では建物部分は、礎石（建屋）そのものが屋敷境となり、建物の裏行きについては、溝等の掘り込みを伴う屋敷境であったと考えられる。調査地で検出した遺構のうち屋敷境の可能性があるのは、調査地北側のSP4から敷地南側のSK133にかけての柱穴であろう。柱穴がある程度並ぶ点と他の遺構との切り合いから、この位置に屋敷境を想定できる。図2の絵図を元に総社門から延びる街路の角を起点に屋敷絵図記載の寸法から測りこむと、この想定ラインは万治期には「桃屋」と「同人（桃屋）」、寛延期には「やゑ」と「岩之助」との屋敷境に概ね該当する。この遺構を基準に、絵図記載の表地口から測りこんだ屋敷割が図3に示した想定ラインである。以下、東側から屋敷地1から4と呼称する。

建物跡（図3）　全ての屋敷地において礎石を確認したが、建物の構造を復元できるものはない。屋敷地1と2では扁平な河原石を使用した礎石で、大きさは10～20㎝を測る。屋敷2では下層遺構である2-SK70内で割石を検出した。大きさは30～40㎝を測り、河原石の礎石とは様相が異なるが、2-SK70に伴うものではなく町屋建物の礎石あるいは根石であろう。屋敷地3では30～50㎝を測る割石の礎石を検出した。この範囲には掘り込みがほとんどなく、江戸時代を通じて建物部分の使用方法に変化が無かったといえる。屋敷地4では、土間の三和土を少なくとも2面確認した。上面については、部分的な検出に留まり、その広がりは明らかではない。下面については図3に示した範囲である。しかし、この範囲で検出した礎石はいずれも検出レベルから上面の土間に伴う可能性が高く、下面の土間に伴うものは確認できなかった。建物を復元するに至らなかったが、検出遺構の粗密から建物の範囲は、概ねSE11とSE07を結ぶ線より南側までと想定できる。

竈（図5～7）　燃焼部の構造が明瞭に残るものは6基、石材あるいは塼等の構造物が部分的に残存するものが4基、被熱し赤化した土の検出からその可能性を指摘できるもの4基である。そのうち構造の判明する竈はいずれも生活面を掘り込む半地下式である。燃焼部1と2、燃焼部8と9、燃焼部12と13については2基一組の竈と考えられる。燃焼部1と2は、直径約60㎝、深さ14㎝の掘方内に石材の上面を水平に設置している。側壁は残存していないが底石であろう。被熱範囲から焚口は東側と想定できる。焚口と想定され

図3　第1面平面図・断面図

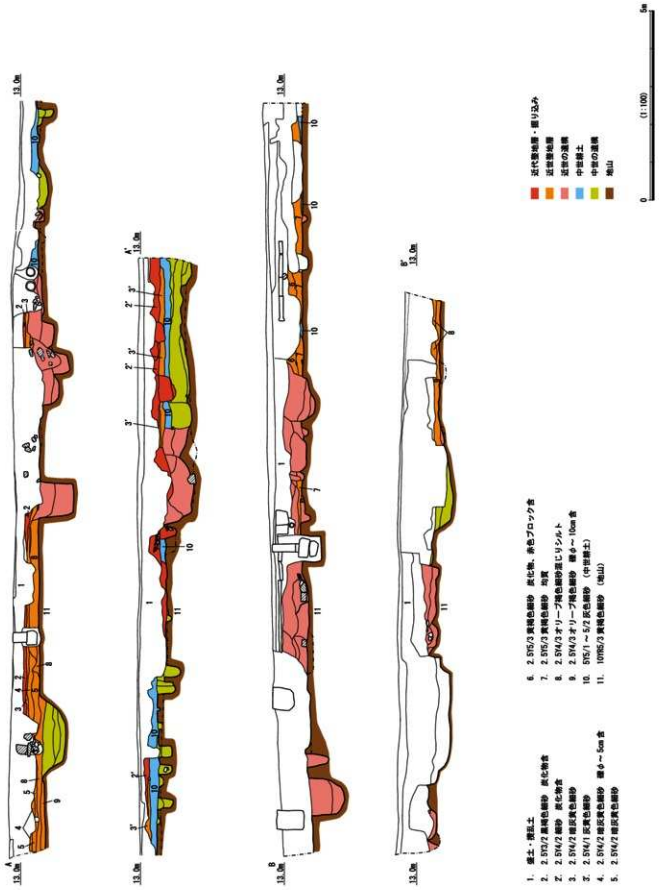

図4　調査区土層断面図

る部分には南北方向に一列に並ぶ豊島石の石列が存在する。燃焼部とは別の掘方を有しているものの、この石列の上面は燃焼部の底石と同レベルである。この石列に関連して一辺約1.5mの方形の土坑SK100が伴う。SK100の底面は薄く被熱しており、詳細な構造は不明であるが竈1と2の作業室であろうか。

燃焼部3はSK100の南側1.2mの場所に単体で存在している。掘方は南側が撹乱を受けているため厳密ではないが、一辺約1.6mの隅丸方形を呈し、深さは約30cmを測る。掘方中央で豊島石を使用し、コの字状に組んだ施設が検出された。石材は粘土で被覆されていたことから、これらは燃焼室の芯材として使用したのであろう。焚口は西側で、燃焼部の規模は奥行き1.2m以上、幅27cm、高さ16cm以上を測る。底石は扁平な河原石である。掘方埋土の下部にも被熱部分があることから燃焼部3に先行する別の燃焼部の存在が推測される。1は径10.9cmの底部糸切の土師器皿である。燃焼部の埋土から出土した。燃焼部4と5及び6と7については構造がはっきりしないものの、被熱範囲が等間であり、2基一組の竈が存在した可能性が高い。切り合いから竈6・7→竈4・5→竈3の構築順となる。これらの竈は屋敷内の西側に構築されている。

屋敷地4で検出した燃焼部8と燃焼部9は同一の掘方内に2基1組で設けた半地下式の竈である。掘方の規模は東西1.3m以上、南北1.8m以上、深さ最大で20cmの隅丸長方形を呈す。芯材には円礫を用い、コの字状に配置し底面には厚さ1.5cmの平瓦11と12を敷いている。燃焼部8の規模は、奥行き70cm以上、幅18cm、高さ12cm以上を測る。焚口は西側である。掘方下層には本竈に伴わない被熱部分が認められ、先行する遺構が存在した可能性が高い。燃焼部8の北側にも先行する被熱部分が確認できる。燃焼部8の奥壁に接した炭層中から土師器皿4、埋土から焙烙A2類の5が出土、燃焼部9からは土師器皿6、刷毛目唐津7が出土している。時期は焙烙及び刷毛目唐津の年代観から17世紀半ばから後半頃と想定できる。

燃焼部11は単体で構築され、位置関係から燃焼部7を切ることは確実であるが、掘方埋土の土質に明確な違いがなく平面的には切り合いを検出できなかった。掘方は円形を呈し、規模は直径1.8m、深さは20cmを測る。豊島石をコの字状に組み、底面に塼を敷く。燃焼部の規模は奥行90cm、幅17cm、高さ16cm以上を測る。奥壁側の塼13は1辺27cm、厚さ3cmを測り、4ヶ所に穿孔があり、1箇所を除き埋めている。

燃焼部12と13は同一の掘方内にある2基一組の半地下式の竈である。掘方は隅丸長方形を呈し、規模は南北2.4m、東西1.4m以上、深さは約25cmを測る。芯材の残りは良好ではないが、燃焼部11と同様の構造であろう。芯材に石材を用い塼で底面を構築している。焚口は西側である。掘方内からは、織部焼2と丹波焼擂鉢3が出土した。竈11の北側約2mの位置から塼と平瓦を検出した。被熱範囲等は確認できなかったが、燃焼部の床面であろう。燃焼部14とした。10は三葉の中心飾りに唐草が2転する瓦当を持つ。燃焼部13の南側にある深さ約10cmの浅い土坑であるSK175の底面でも被熱痕跡が確認できた。9の土師器皿のみが出土した。竈はいずれも出土遺物は少ないが、18世紀代まで下るものはない。

塼列建物（図8） 屋敷地3において、調査区南壁より10m北側の位置で塼列建物を検出した。塼列は、本来周回していたと想定されるが、南辺、東辺と西辺の一部のみが残存していた。残存規模で東西方向4.25m、南北方向は2.7m以上を測る。堀方は幅・深さとも約10cmを測る。南辺の塼列は中央部約2mの範囲が30cmほど南へ拡張する。塼の遺存状態は悪く、積み上げの有無は不明である。塼列に伴う礎石等は確認できない。塼15は幅24.7cm、厚さ2cmを測る。塼16は幅25.3cm、厚さ2cmである。塼の厚さは概ね2cm、幅は24～25.3cmである。塼以外出土しないため、時期は特定できないが江戸時代の遺構であろう。

井戸（図9） 13基の井戸を確認した。井戸は大きく石組井戸と桶組井戸に分類できる。SE01は掘方径1.8m、井戸底の標高は概ね9.4mで、最下層に木材を配置し、その上部に石組みが約1m残存している。SE02は掘方径2.0m、井戸底の標高は概ね9.8m、下層で石組みを検出した。SE03は石組井戸であるが、内側に径約70cmのコンクリート製の井筒があり、近現代の造り替えであろう。概ね幕末以降、こうした瓦組井戸や土管（土器）組井戸、コンクリート井戸など様々な構造の井戸が増加する。SE04は石組井戸で掘方径2.0m、井側径は80cmを測る。SE05とSE06はコンクリート井戸及びその造り替えと見られ、近現代の所産。SE07は石組井戸、掘方は径1.4mで石組みとの隙間はほとんど存在しない。SE08は石組井戸である。埋められた痕跡がなく、旧建物内で使用されていた可能性が高い。SE09は掘方径2.0m、井戸底の標高は概ね9.8mを測る。石組みは3石程度残存していた。埋土中に石材が散見されたことから、本来は地表まで石組みであった可能性が高い。石組みより下部は板材の痕跡がわずかに残っていたことから、桶側であったと考えられる。遺物量は多くないが井側埋土から散発的に出土した。17・18は手づくね成形の土師器皿で口径8.5cmのⅠC類と口径13.2cmのⅠA類である。19は唐津焼碗、20は唐津焼徳利口縁部である。17世紀前半前葉に位置づけられる。SE10は掘方2.5m、井戸底の標高は9.1mを測る。井側内の下部埋土がほぼ垂直であることからSE09と同様の構造と考えられる。SE11は掘方最大径2.7m、井戸底の標高は約9.1mである。上部は撹乱を受けていたが、下部で板材の痕跡を確認した。埋土中に石材が認められないことから、桶組井戸の可能性が高い。遺物は井側埋土から出土した。21は底部糸切の土師器皿、22は焙烙E類である。18世紀代に位置づけられる。SE12とSE13は調査区外に広がるため、詳細は不明である。

SK65（図8） SE01の東に近接して連続する浅い掘り込みを検出した。この上位にはSK31とSK54が存在することから、当初の構造は明らかではないが、2列8基あるいは10基の埋甕遺構と想定できる。遺物の出土はないが、上位のSK31とSK54が遺構の下限を示す。SK31は埋土中に大量の貝殻を含み、食物残滓等の廃棄土坑である。45～48が出土した。45～47は底部糸切りの土師器皿、48は焙烙E類である。染付類は時期幅があるものの概ね18世紀後半までにおさまる。SK54は49～51の糸切の土師器皿とともに二重網目文碗、刷毛目碗が出土しており、17世紀後半から18世紀前半に位置づけられる。

SK85（図9） 23の備前焼の水屋甕を逆置し、底部に直径2.5cmの焼成後の穿孔がある。甕内は空洞に保たれていた。上部構造が削平されているため断言できないが、水琴窟を意識した遺構であろう。

SK183（図10） 燃焼部11の北側約1mに位置する土坑。燃焼部14及び礎石が上位にあったため、全体プランの完掘は2面目で行った。長辺2.2m、短辺1.8mの隅丸長方形を呈し、深さは50cmを測る。撹乱と別遺構に切られているものの、遺物がまとまって出土した。遺物は埋土3層以下より万遍なく出土したが、特に南東部に多い傾向があった。遺物の大半は土師器皿24～32で、口径10cm前後のものが多い。底部の切り離しは全て糸切りである。底部外面と立ち上がりの境が目立たない24～26と境が明瞭な27～32に大きく分類できる。31と32は灯芯痕跡を有す。35は瀬戸美濃焼丸皿、33は唐津焼小碗、34は唐津焼皿で内面に草文を描く。36は唐津焼徳利口縁部、37は備前焼壺、38は焙烙A2類である。39は備前焼擂鉢で内面に1条7単位の直線的な摺目。40はコビキBの丸瓦、ほぼ完存している。41はコビキAの丸瓦、玉縁部を欠損する。肥前磁器を含まない組成から概ね17世紀第1四半期に位置づけられる。

土坑（図11） 屋敷地3の敷地南側で長さ2.5m、幅1.5m、深さ60cmの方形のSK02を検出した。位置的には建物内にあたる。42・43は手づくね成形の土師器皿で、径9cmのⅠC類である。44は瀬戸美濃焼折縁皿である。17世紀第1四半期の遺構である。その北側でSK203を検出した。調査区外に延びるため全容は不明であるが、深さ80cmを測り、内部から幕末期の遺物がまとまって出土した。55は柿釉皿、56は焙烙H類である。57は割れた蝋石の一部であるが、片側の平坦面に鏡文字で「御蝋燭」の文字が彫られている。近接するSK202からは柿釉皿52、備前焼皿53、E類からH類への過渡期的とみられる焙烙54。屋敷地2のSK94から瓦質羽釜の58が出土した。立ち上がり外面の突帯間に陽刻が認められる。

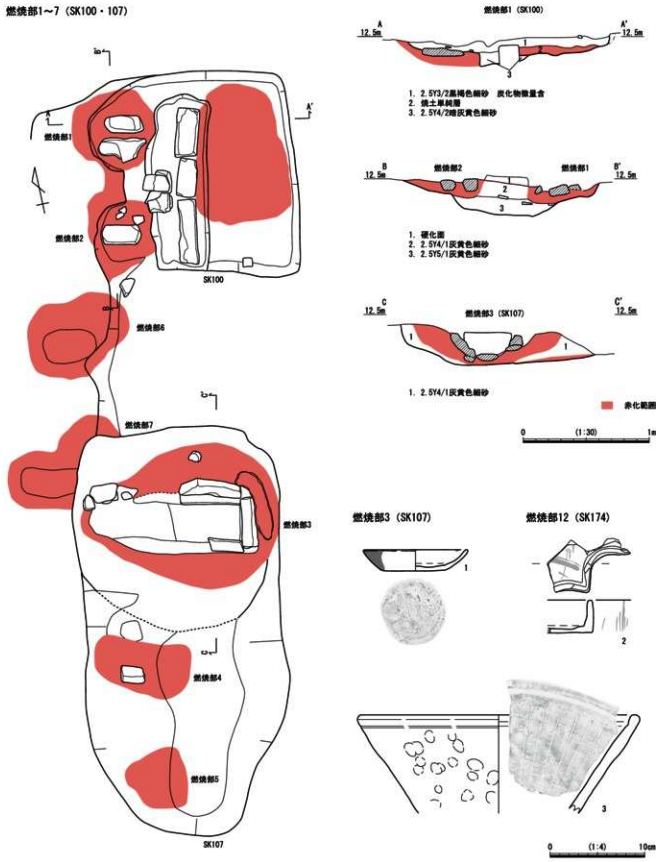

図5　竈実測図・出土遺物実測図（1）

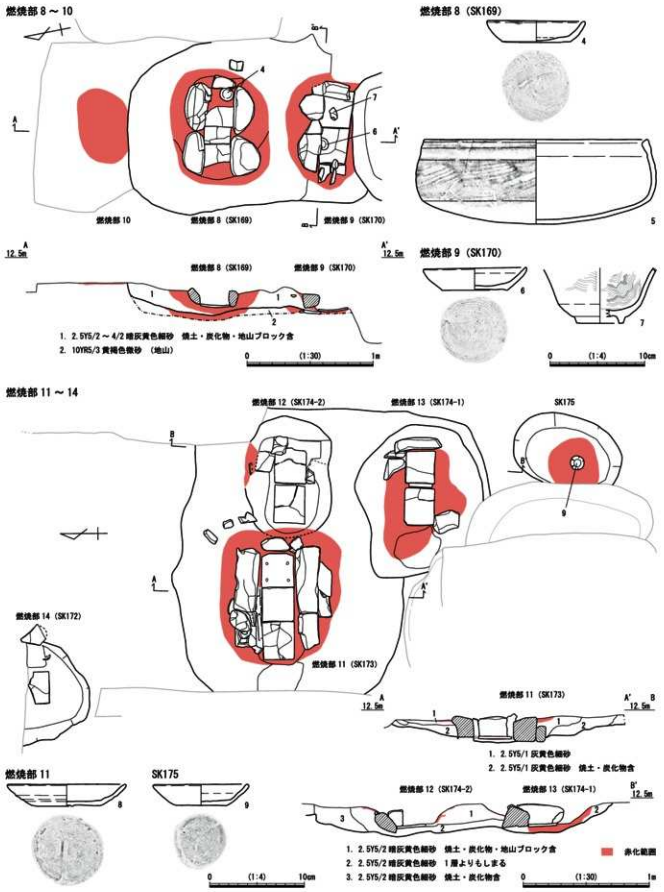

図6　竈実測図・出土遺物実測図（2）

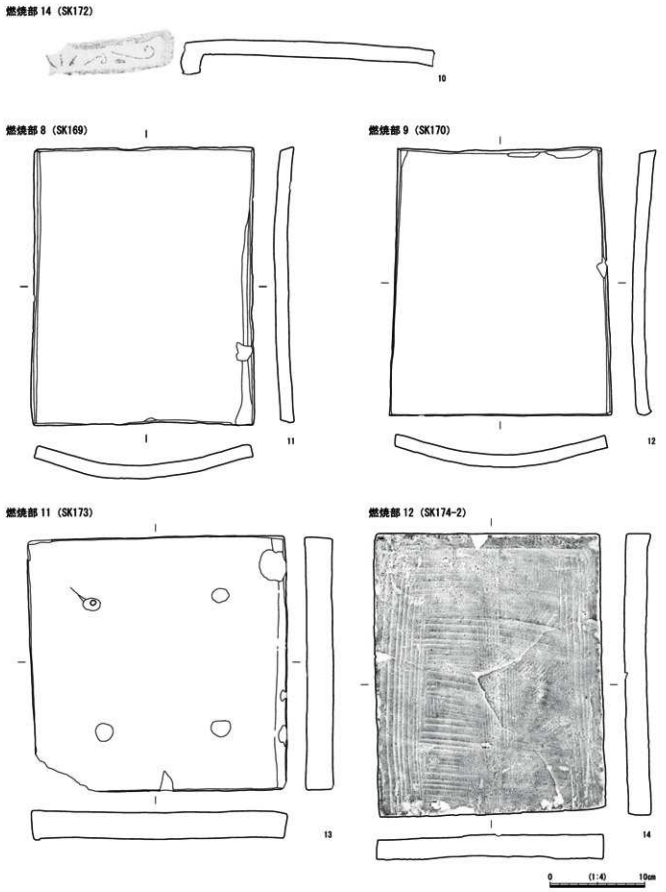

図7　廃出土遺物実測図（3）

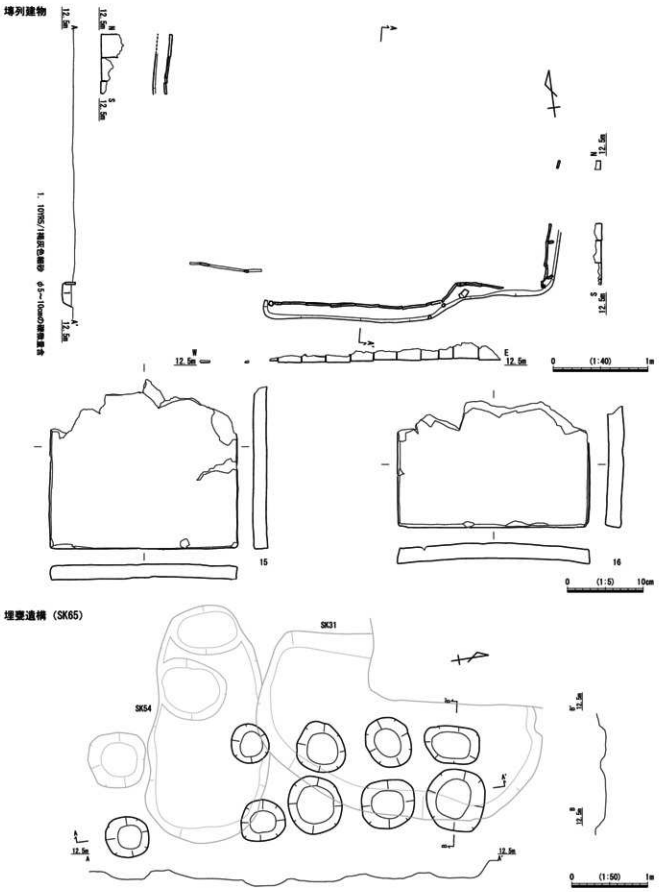

図8　塀列建物・埋甕遺構実測図

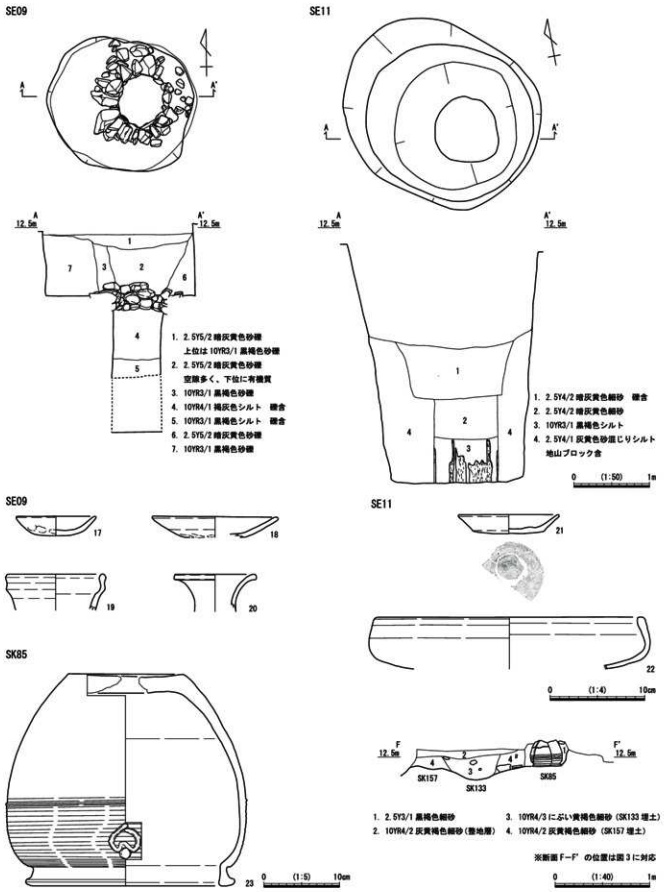

図9　井戸実測図・SK85実測図・出土遺物実測図

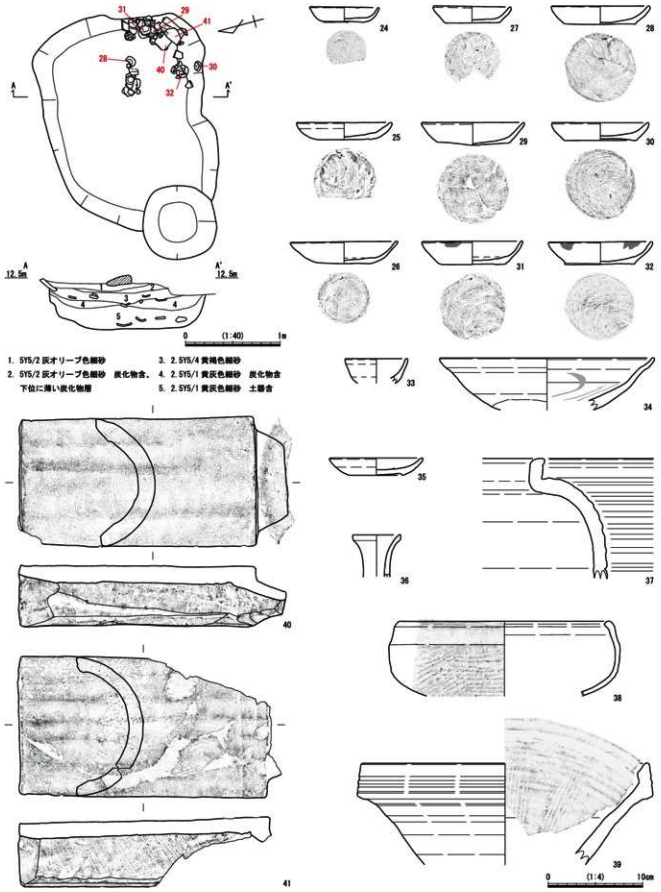

図10　SK183平面図・断面図・出土遺物実測図

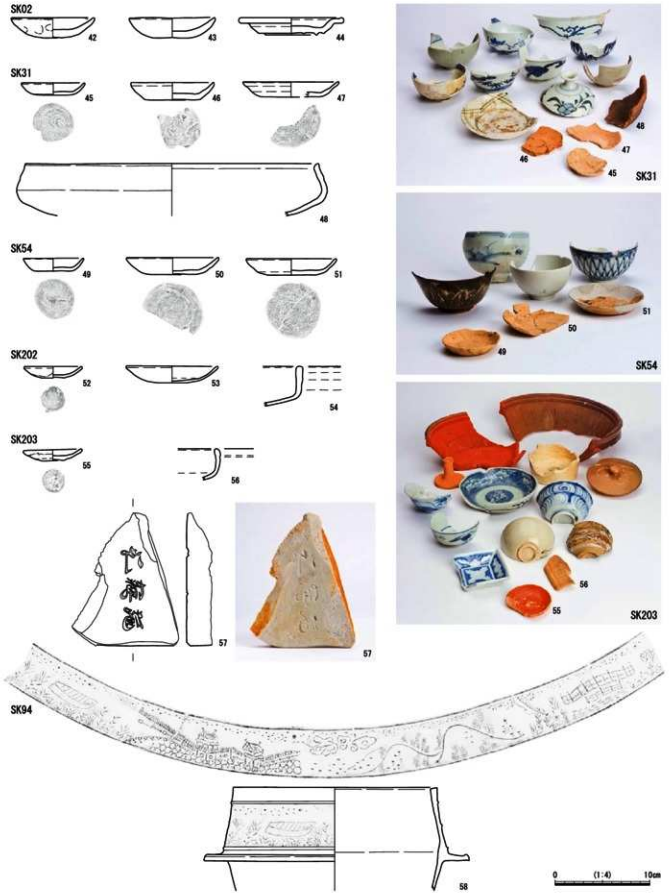

図11　土坑出土遺物実測図

第３節　江戸時代以前の遺構と遺物

地山面で検出した遺構である。竪穴建物跡、溝、土坑、柱穴等があり、時期は弥生時代後期から室町時代までと多岐にわたる。以下、時代毎に記述する。

2-SP209（図12）　調査区のほぼ中央で検出した。直径24㎝、深さ5㎝を測る。埋土中より、弥生時代後期の土器底部が出土した。**59**は外面に右上がりのタタキ目を有し、底部には径1㎝の穿孔がある。

2-SI01（図13）　調査区の西側で検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、概ね建物跡の４分の１強を検出した。復元すると一辺約6mの方形建物になる。深さは床面まで約25㎝を測る。壁際に上幅約25㎝、下幅約10㎝、深さ約8㎝の周溝が巡る。地山を掘り込み床面とし、周囲は約5㎝高くベッド状となるが貼床等は認められない。中央部分は撹乱を受けているが、建物中央から延びる溝を検出した。溝は壁際の土坑（SK01）へとつながる。SK01の規模は南北約1.4m、東西約1m、深さは最大で70㎝を測る。壁際の埋土中から細片となった土器がまとまって出土した。胴部の破片が多く、接合検討を行ったが図化に耐えうるものは少ない。かろうじて図化できたのが**60**～**62**である。口縁部の形態にいくつかバリエーションが認められ、少なくとも３個体の庄内式並行期の甕が出土している。胴部片は図化に耐えうるものはなく、器壁の残りは悪いものの部分的に細かい平行タタキが認められる。

2-SK04（図14）　調査区の西端で検出した。調査区外に延びるため全容は不明であるが溝になる可能性もある。遺構の規模は幅1m以上、長さ3m以上、深さ約20㎝を測る。全容が判明しないため、断言はできないが、遺構の東肩の軸は概ね正方位を指向する。土坑底面から多くの布目瓦が出土したが、摩滅したものは少ない。106は平瓦で広端面の一部を除き３隅が残り全形が復元できる。一枚作りで、凸面には斜格子タタキ、凹面端部はわずかに面取りを施す。全長35.8㎝、狭端幅25㎝、厚さ2㎝を測る。色調は灰白色で焼成は堅緻である。姫路城跡第338次（平野町）出土の平瓦のうち「斜格子3」としたタイプに類似するが、法量は若干異なっている。他の遺物は**63**の土師器皿のみ出土した。時期を決定するには遺物量が少ないものの、時代の下る遺物を含んでいない点から、奈良時代の遺構と考えられる。

2-SD07(図15)　調査区の南側にある東西方向の溝である。溝の方位はN14°Eで江戸時代の町割と平行する。規模は延長17m、幅1.5mから1.7m、深さは最も深いD断面で20㎝を測る。図12のD断面付近では１条の溝であるが、E断面付近から西側は２条に分離する。遺物は溝内の底部付近から出土した。**69**は手づくね成形の土師器皿、**70**は回転台成形で底部ヘラ切りの土師器皿である。**71**は竜泉窯青磁皿、**72**は須恵器碗である。**73**は瓦質土器の羽釜、**74**は土師器甕で、口縁部内側までハケ調整が施される。遺物の組成中に時代が下るものが認められないことから平安時代末から鎌倉時代に位置づけられる。

2-SK44(図15)　2-SD07の南側で検出した一辺約1mの土坑である。土坑内から**75**のような手づくね成形の土師器皿が数点出土した。時期は2-SD07と同時期と考えられる。2-SD07南側で検出した直径20㎝～70㎝の柱穴と土坑は当該期の遺物を含んでおり、埋土も共通することから同時期の遺構として認識している。柱穴については、検討を行ったが明確に建物と認識できるものはなかった。これに対して2-SD07の北側及び調査区東側のピットについては、遺物の出土がなく時期の特定ができない。ただし、埋土が類似していることから同時期の所産と考えている。

2-SK155（図14）　調査区のほぼ中央で検出した不整円形の土坑である。規模は東西4.3m、南北3m以上、深さは最大で40㎝を測る。東側は角度を持って掘りこまれるが、西側は比較的緩やかに立ち上がる。土坑のほぼ中央部に礫と布目瓦が山積みになった状態で埋められていた。その規模は東西2.2m、南北2.8m、高さ40㎝を測る。軒瓦を除く出土瓦の総重量は約106kgで、平瓦93kg、丸瓦13kg、重量比で7：1である。多く

は小片である。これらに混じって中世の遺物が出土した。64は瓦質土器鉢、65は鍔部分が台形を呈す石鍋である。66は底部外面に目痕の残る青磁壺で、越州窯産か。67は口縁部をわずかに拡張する備前焼播鉢、68は東播磨系須恵器鉢で口縁部を巻き込んでいる。瓦を含め各時代の遺物を含むが、土坑自体は室町時代に構築されたものである。検出状況から周辺に散在していた瓦礫を廃棄するために掘ったものと推測できる。

2-SK03（図15）　調査区南西隅で検出した東西5m以上、南北4m以上を測る土坑である。規模に反して遺物の出土は極めて少ない。土層断面は水平な堆積で、人為的に埋められているが、水成堆積等もなくその性格は不明である。図化した遺物はいずれも下層から出土した。76は手づくね成形の土師器皿、77は脚付きの杯である。78は鍔部の退化した播磨型の土師器鍋。2-SK155同様、室町時代の遺構である。

2-SK70（図15）　調査区東端に位置する。検出時は土坑と認識したが、上幅約2.5mの溝である。調査区内で屈曲し、南側と東側へそれぞれ延びる。溝の断面は台形を呈し、深さは最大で65cmを測る。調査区外に延びるため、遺構の性格は判然としないが、区画溝と考えている。遺物の出土は少なく、79～81を図化した。いずれも溝下層埋土からの出土である。79は白磁壺、80は土師器鍋の口縁部である。小片であるため断言はできないが外面にタタキを有すタイプであろう。81は口縁部が薄板状になる備前焼播鉢である。80の存在から遺構は16世紀代まで下る可能性もある。遺構の北側に2-SD01が平行しているが、遺物が出土していないため詳細は不明である。また、その延長部分に2-SD07が存在するが、いずれも掘方が浅いため直接つながるかどうかも判然としない。

2-SD04・05・06（図12）　2-SD04と2-SD05の軸はN65°Eで、規模は前者が最大幅80cm、深さ25cm、後者は幅1.1m以上、深さ90cmを測る。両者の間隔は約18mを測る。遺物が伴わないため、わずかな切り合いによる判断ではあるが、2-SD07をはじめとする時期の遺構に先行する可能性がある。

2-SD06は幅1.2m、深さは最大で20cmを測る。溝の軸はN14°Eで2-SD07と直交する。2-SK155を切ることから時期の上限を把握できる。検出状況から2-SD07との関連を考えたが時期が異なるため、直接の関連はない。

出土瓦（図16・17）　調査地からは布目瓦が少なからず出土している。瓦当については図12に示したように調査区南側の各遺構から出土している。2-SK04を除いて、いずれも中世の遺構からの出土で原位置を保ったものではない。瓦当は23点確認した。内訳は本町式軒丸瓦2点（82・83）、古大内式軒丸瓦3点（84～86）、古大内系軒丸瓦3点（87～89）、毘沙門式軒丸瓦2点（90・91）、複弁八弁蓮華文軒丸瓦1点（92）、意匠不明軒丸瓦1点（93）、本町式軒平瓦9点（95～103）、毘沙門式軒平瓦1点（104）、唐草文軒平瓦1点（105）、鬼瓦1点（94）である。82は面径15.5cmの本町式Ⅰ型L寸である。87は今里により続播磨国府系瓦の一つとして位置づけられた単弁14葉蓮華文軒丸瓦で、中房部蓮子の配列は1＋6、子葉の先端に切り込みがある。90と91は蓮弁の間に珠文を配すタイプで、中房部を欠くが毘沙門式Ⅱ型の可能性が高い（今里1995）。92は明石市林崎三本松窯あるいは鳥羽離宮金剛心院で出土しているものと同文である。12世紀第2四半期～中葉の実年代が考えられている。105はC字上向形中心飾の唐草文軒平瓦で12世紀後半に成行する文様である。（上原2014）。94は類例がなく、中心文様等が不明であるが、鬼瓦であろう。盛り上がった脇部に直径3cmの珠文を配している。本町式95～103は曲線顎Ⅱで、104の毘沙門式は曲線顎Ⅰである。本町式軒平瓦95と96には瓦笵の被りが認められ、瓦笵の打込みにより外縁を成形している。こうした製作手法は、平城宮では本町式の祖形とされる6721型式のみに見られる事象である（岸本1995）が、播磨国府系瓦では古大内式、長坂寺式、北宿式の軒平瓦に共通して認められる。

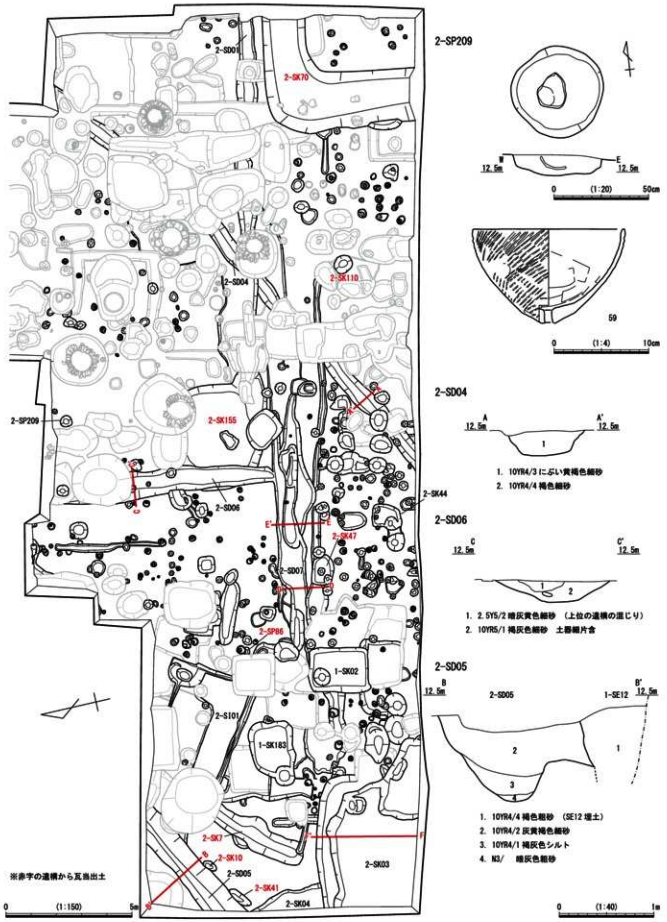

図12　第2面平面図・溝断面図

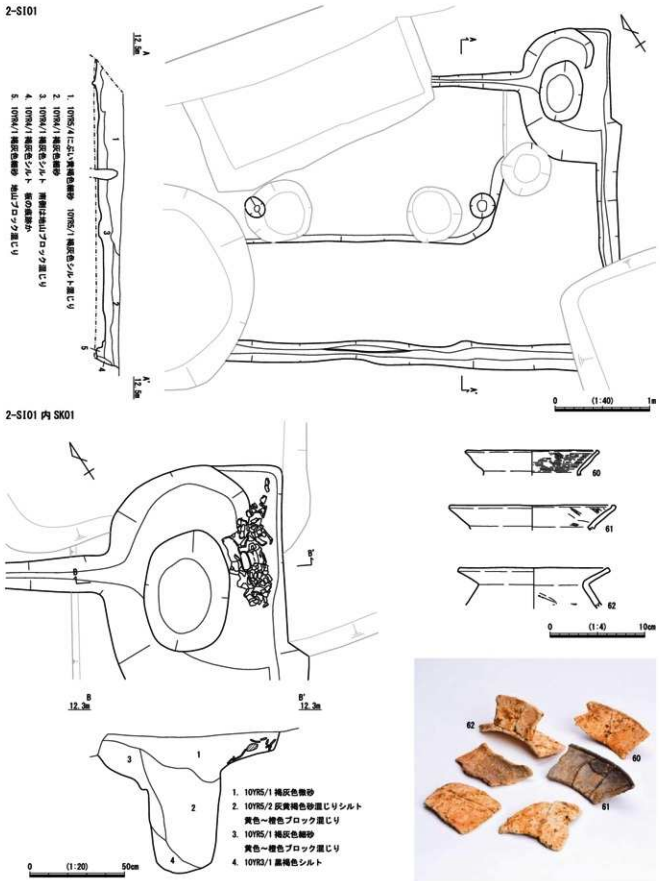

図13　竪穴建物跡実測図・出土遺物実測図

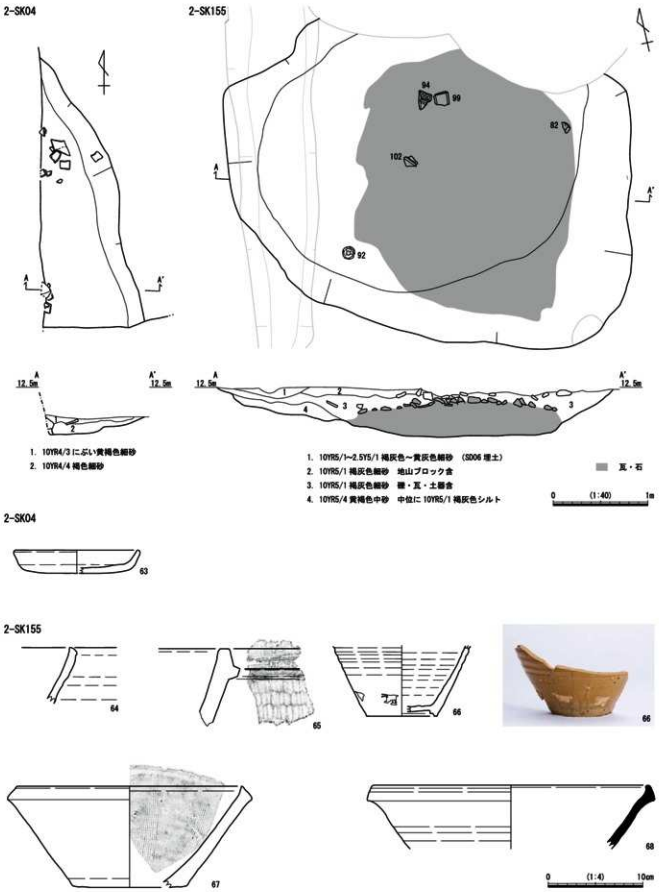

図14　古代瓦出土遺構実測図・出土遺物実測図

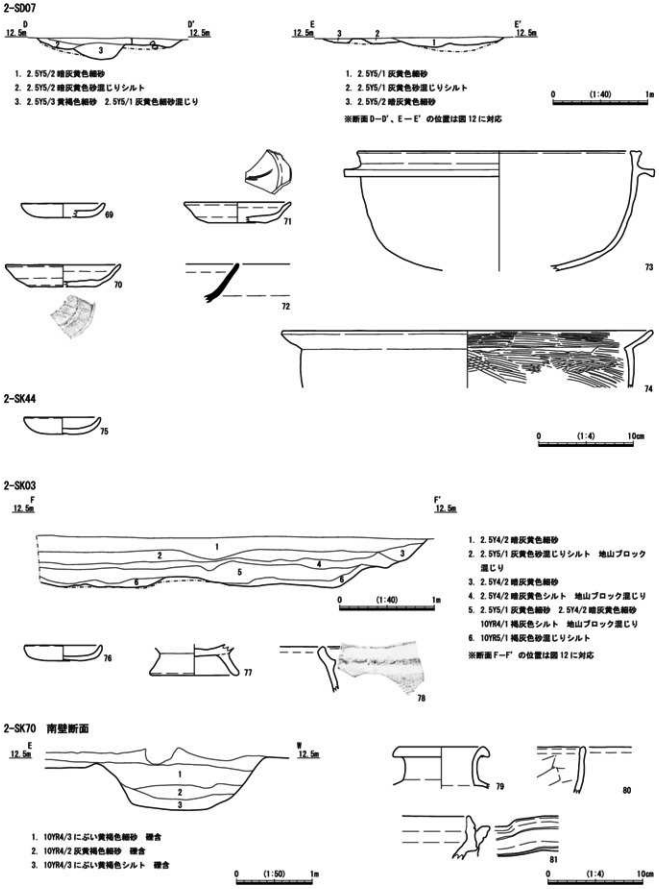

図15　中世遺構断面図・出土遺物実測図

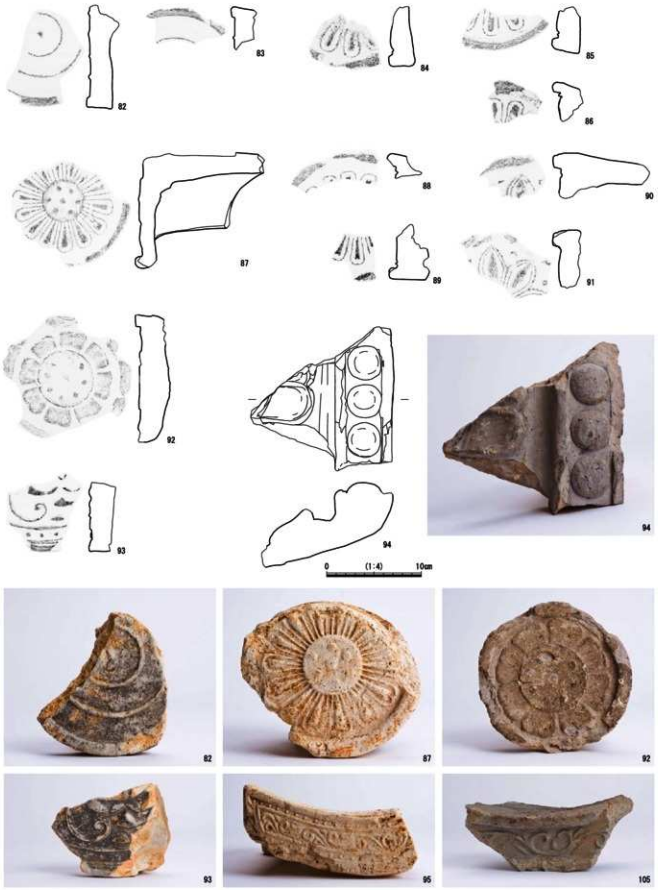

図16　瓦実測図 (1)

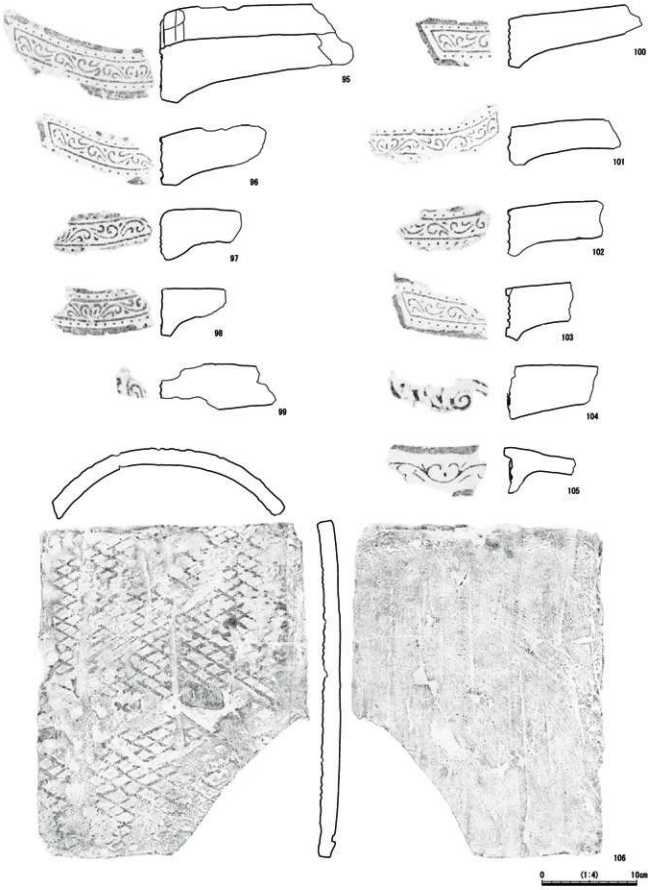

図17 瓦実測図（2）

第Ⅳ章　総括

調査地である綿町は町屋の所持者が特定できる絵図が残る城下でも数少ない地域の一つである。加えて地子銀帳や絵図から屋敷地所持者の変遷を追究することができ、文献資料と考古学データの対照が可能な地域である。残念ながら今回の調査では、敷地境、建物構造等のハードに関する明確な考古学的データを得ることはできなかった。しかし、姫路城下町におけるこれまでの町屋部分の調査成果から屋敷内の構造については、街路－建物－井戸（水場）－奥（庭・廃棄土坑・蔵）といった共通する空間構造が明らかになってきている。今回の調査でもその空間構造を追認した結果となった。更に埋甕遺構の検出から江戸時代の前半から屋敷の奥が積極的に利用されていることも判明した。また、検出した竈は、いずれも17世紀代に位置づけられるもので、江戸時代前半における建物の内部構造の一端を明らかにした。

第2面目とした地山面では弥生時代後期、庄内式並行期、奈良時代、平安～鎌倉時代、室町時代に至る遺構・遺物を確認した。庄内式並行期の建物跡は近辺では検出例の少ない時期の遺構である。後世に撹乱を受けていたものの最大で25cmの深さが残存しており、遺存状態は良好であった。奈良時代以降については、正方位を指向すると考えられる2-SK04及び調査地から点在して出土する瓦当の存在から、当時の瓦葺建物が調査地内あるいは隣接した位置にあったことを推測させる。また、数量は少ないものの平安時代の瓦が出土している点も特記すべき点である。姫路城跡第338次（平野町）でも瓦が大量に出土しており、従来の本町遺跡より広い範囲で古代の建物跡と結びつく成果が得られ始めている。

平安時代以降の調査成果からは、江戸時代の築城ライン（N14°E）と平行する遺構が、すでに平安時代末から鎌倉時代に存在していたことが判明した。また、遺構の一部が調査区外に延びるため断言はできないものの、室町時代以降でもその傾向は大きく変わらない可能性が高い。さらに調査地において総社ライン（N5°E）や飾磨郡の条里（N21°E）方向の遺構が検出されなかった点、厳密な時期は不明であるが2-SD04と2-SD05のように大きく斜行する遺構の存在が確認できた点も今後追究していかなければならない課題である。このように近年、姫路城城下町跡下層の遺構の様相が明らかになりつつある。江戸時代の下層という厳しい条件下ではあるが、得られる情報は都市・姫路の原点として播磨地域の歴史を探るうえで重要な知見であるといえよう。

引用・参考文献

今里　幾次　1995『播磨古瓦の研究』真陽社

上原　真人　2014「古代の終焉と播磨の瓦生産」『明石の古代Ⅱ』発掘された明石の歴史展実行委員会

岸本　直文　1995「瓦塼類」『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良県教育委員会

九州近世陶磁学会事務局　2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

中川　猛　2012「焙烙考－姫路と周辺の焙烙－」『山口大学考古学論集Ⅱ』中村友博先生退官記念論集作成委員会

乗岡　実　2000「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

長谷川　真　2006「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

2007「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究』21　中世土器研究会

姫路市教育委員会　2013『姫路城城下町跡－姫路城跡第289次発掘調査報告書－』姫路市教育委員会

2017『姫路城城下町跡－姫路城跡第338次発掘調査報告書－』姫路市教育委員会

2017『姫路城城下町跡－姫路城跡第354次発掘調査報告書－』姫路市教育委員会

堀田　浩之　1988「築城プランと基準線」『姫路市史』第14巻　別編姫路城　姫路市

三浦　俊明　1997『譜代藩城下町姫路の研究』清文堂

森　恒裕　1991「淳心学院出土遺物の検討－16世紀後半から17世紀初頭における姫路城下町の様相に関する予察－」『姫路市立城郭研究室年報』Vol.1　姫路市立城郭研究室

写真1　調査区全景　オルソ画像

写真2　調査区北側全景　（南から）

写真3　理甕遺構　（北から）

写真4　調査区南側全景（西から）

写真5　2-SD04（南西から）

写真6　2-SK70（北から）

写真7　SE09（南から）

写真8　燃焼部1・2（東から）

写真9　燃焼部3 断ち割り（西から）

写真 10　調査区西側第 1 面全景（東から）

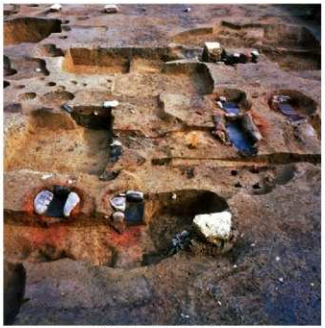

写真 11　竈群　（東から）

写真 12　塀列建物跡（南から）

写真 13　燃焼部 8・9（西から）

写真 14　SK185 遺物出土状況（西から）

写真 15　燃焼部 11・12・13 断ち割り（西から）

写真 16　調査区西側第 2 面全景（東から）

写真 17　2-SI01・SE11・2-SD05（東から）

写真 18　2-SI01（北から）

写真 19　2-SK03・SK04（東から）

写真 20　2-SK155（東から）

写真 21　2-SD07　（東から）

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第343次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第44集
編著者名	中川　猛
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
発行年月日	平成29年（2017年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	調査番号
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	姫路市鍛町（ひめじしかじまち）135番	28201	020169	34°49′56″	134°41′39″	2015.9.8～2015.12.1	666㎡	集合住宅建設	2015 0245

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
姫路城城下町跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世 近世	土坑 竪穴建物跡 溝 溝・土坑・柱穴 塀列建物跡・竈・井戸・土坑	弥生土器 土師器 播磨国府系瓦・土師器 須恵器・土師器・磁器・瓦 陶磁器・瓦

要約	江戸時代の町屋跡4軒を調査した。建物内において竈を検出するとともに塀列建物や埋甕遺構など江戸時代の町屋に関わる知見を得た。城下町の下層では、庄内式並行期の竪穴建物跡を検出した。また、瓦の出土状況から奈良時代の瓦葺建物が調査地あるいは直近に存在する可能性が高い。城下町形成以前の遺構の軸方向には、飾磨郡条里方向がなく、平安時代末以降の遺構は概ね江戸時代の町割と平行していることが判明した。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第44集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第343次発掘調査報告書―

平成29年（2017年）年3月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　兵庫県姫路市飾東町庄57番地2